

平成27年度「川崎市防災シンポジウム」抄録

【第一部 基調講演】

講演者：草 貴子（東日本大震災災害伝承語り部、仙台市泉区市名坂東町内会長）

タイトル：災害伝承10年プロジェクト

1 紹介について

○自己紹介

- ・女川町生まれ、サラリーマンの夫と3人の子供を持つ主婦
- ・現在、仙台市泉区市名坂東町内会長を務めるほか、仙台市立七北田中学校評議委員、市名坂小学校避難所運営委員会事務局長、仙台市地域防災リーダー、子育て支援おもちゃ図書館“ずんだっこ”代表等を併任している。

○市名坂東町内会（平成20年4月1日設立）の紹介

- ・役員全員が女性。お互いが思いやりを持って、それぞれの家庭を第一に運営している。
- ・母親が地域で生き生きと活動する姿を見せることで子どもや夫もついてくる。
- ・防災については特に重要と考え、震災前から防災を強く意識した集会所作りを行っていた。
- ・銀行にローンを組んで集会所を建てたのは仙台市で初めてのことで。

2 東日本大震災に関する町内会の活動

○震災の時の町内会長としての行動

- ・近所の電気店で会計をしているときに被災、すぐに自宅に戻ったところ、町内会館隣の公園には大勢の人が避難してきていた。そこで、町内会名簿や非常持出品を抱え、集会所を開けたところ、すぐに100名もの人が避難してきたため、以後、3月20日に閉鎖するまで、避難者からリーダー・副リーダーを選任するなど集会所の主体的な運営を任せながら、それを町会役員がサポートする形での避難者支援を行った。

○震災後の子育て世代への支援の開始

- ・町内会未加入のマンション住民は、転勤族で若い家庭も多く、親戚もいないため、集会所を解放し、子育て支援を行なうことにした。
- ・平成23年11月1日に「おもちゃ図書館ずんだっこ」が誕生した。
- ・他に防災便利マップの作製や、消防署と連携した母子に対する講話の開催、郷土料理をみんなで作って食べる会や、クリスマス会の開催などを行っている。

○市名坂小学校区避難所運営委員会の発足

- ・小学校を拠点とした様々な団体（町内会、連合町内会、市民センター、児童館、民生委員、青年団、PTA、婦人防火クラブ等）で構成。
- ・女性ならではの視点をおおいに生かすため、常日頃より地域に顔が良く見え、母親的な立場で人生経験豊富な知識と経験を地域で活用する「女性コーディネーター」を設置した。

○地域内での活動

- ・七北田方言防災カルタを、高齢者や児童館と協同して作成した。
- ・泉区女性町内会長の集いを立ち上げた。

- ・その他、震災時には沢山の方の様々な思いや行動を沢山経験した。何が正しいということではないかも知れないが、色々と考えさせられた。

3 所感について

○消防署の活動

- ・消防署については、災害出動にあたった消防署員も沢山の悲惨な光景を目にしている。こうした悲惨な状況でも不眠不休の働きで対処してくれたことに感謝の気持ちで一杯。

○私の故郷の被災

- ・女川町の実家は被災していた。女川の街は跡形もなく消えてしまった。家も、道も、建物だけではなく、沢山の人も犬も亡くなった。
- ・女川の町は、皆一生懸命、精一杯生きている。
- ・人にはそれぞれ役目がある。生かされている私達はしっかりと生きなければならない。それが私たちの役目、一瞬、一時を大事にしなければならない、それが私の答え。

4 結び

- ・地域防災の大事なことは、自分達の特性を考えて、オリジナリティーのある身の丈にあったものを実践していくこと。
- ・一人ひとりの尊い役目を考えていこう。おじいさん、おばあさん、お父さん、お母さん、子どもの役目、あなたの役目、そして私の役目、みんな違っていい。住んでよかったと思えるように、街を愛して行こう！

【第二部 事例紹介】

講演者：皆川 知子（音楽家、災害ボランティア）

タイトル：被災地の今を知る

1 自己紹介

- ・宮城県仙台市出身、川崎市麻生区在住
- ・昭和音楽短期大学声楽科卒業、昭和音楽芸術学院オペラ研究科修了
- ・音楽活動を行う傍ら、市内を中心にリトミックや音楽療法等を行っている。また、東日本大震災（2011年）を機に、被災地へのボランティア活動を開始。

2 活動の振り返り（2011～2015）

○活動開始（2011年）

- ・個人のボランティアを被災地が受けられない状況下で、市内で音楽仲間と一緒にコンサートを行い、義援金を被災地に送りはじめた。
- ・「被災者のために演奏してもらえないか？」という福島に住む中学の同級生からの連絡に応え、原子力発電所の事故から2000人以上が避難している福島ビックパレットで、物資の支援とともにボランティア演奏を行う。

○写真が結ぶ絆（2012）

- ・被災地の状況を伝えるため一眼レフを購入、「葬式用の写真を撮ってける」という宮城県の仮設住宅に住むおばあちゃまの言葉を胸に、撮った写真をプリントし、再び届けに行った。以後、一眼レフは、被災者との心を結ぶツールとなった。
- ・多くの被災者から「皆川さん、川崎帰ったら、現状伝えて」という言葉をかけられた。この頃には、川崎に戻った後でも被災者から様々な相談の電話がかかってくるようになった。

○福島へ（2013）

- ・アグリパーク代表、半谷さんは「私は加害者でもあり、被災者です」と涙ながらに語る。東京電力の幹部だった半谷さんは、福島の方のために償いたいと、アグリパークを作った方だ。
- ・福島の人たちは「私達が使う電気は女川から送られてくる」と言う。福島で作る電気は、関東地方に送られている。

○活動は今も続いている。

- ・今では地元の人から「皆川さん、南相馬に住んじゃえば？」と言われる関係になっている。被災地での活動は、そこに集まる人との様々な出会いを生みながら、現在も続いている。
- ・2011年の活動当初、富岡町おだがいさまセンターでもらった手紙の最後に「細く長くご支援をお願いいたします」と添えられていた。この約束を2016年の今も心に活動しています。

3 写真による活動の振り返り

○福島県大熊町（2015年2月28日）、南相馬市原町区萱浜地区

- ・福島も宮城、岩手同様に大津波が襲っている。年間75時間しか滞在できない町での活動の様子を写真を中心に紹介した。

○浪江町請戸小学校のこと、石巻市大川小学校のこと

- ・臨機応変に児童全員の命を守った請戸小学校のこと、多くの児童、教員を失った大川小学校のことを写真を中心に紹介した。

○相馬野馬追一千有余年の伝統

- ・地域の伝統を未来に伝える被災地の今を、スライドショーとピアノの弾き語りにより紹介し、来場者に被災地（福島浜通り中心）一歩ずつ前に向かって歩んでいる方たちがいる一方で、厳しい現状がある事と、ボランティアの一端を来場者に感じていただいた。

【第三部 トークセッション】

登壇者：日野 宗門（コーディネーター、川崎市防災企画専門員）、草貴子（基調講演者）、皆川知子（事例発表者）

○発言要旨

- ・お二方のお話を聞いての感想を述べさせていただくと、草さんのお話は、多くの自主防災組織の関係者の参考となったことも多かったのではないかと思う。阪神・淡路大震災で得られた教訓を押しえた活動を行っていて、また女性ならではの細かい気遣いによる活動が行われている。

また、皆川さんのお話にあったが、福島が被災当時の状況のまま残っていることを知らない人は多いのではないか（日野）。

- ・東日本大震災のときに、町内会に入っていないマンションの方を広く受け入れたご経験から、草さんの中で自主防災活動に参加してくれない方に対して、何か感じることはあるか（日野）
- ・マンションの方とは個人情報という壁もあり、加入へのアプローチが難しい。そこで、町内会に入ることでメリットを強く打ち出して、加入促進を試みている（草）
- ・震災時に出てくる町内会への様々な無理な要望についてお感じになることはあるか（日野）
- ・町内会など組織は常に「出来て当たり前」と思われる。町内会長といっても万能ではない。言いたいこともあったがグッとこらえて役割を全うしたが、内心では色々と思うことがあった。大震災のように、大変なことが起きたときに私達は試されると思う。その時現れた人の本性を感じたときは切ない気分だった。その後の人間関係に影響するところもある（草）
- ・個人情報保護法が町内会活動を阻害していることがあるのでは（草さんへの会場からの質問）
- ・東日本大震災でも、個人情報保護法の運用について疑問の声が聞かれている。命に関わることについての運用において、もう少し柔軟に考える必要があるとの声も聞かれている（日野）
- ・オートロックのマンションの場合、町内会を名乗るだけでインターフォンを切られることもあり、もう少しオープンにしても良いのではと思う（草）
- ・震災後に行った様々な活動により加入者は増えたか（草さんへの会場からの質問）
- ・転勤族がほとんどで土地勘が無い、小さいお子さんを持つお母さん方を中心に多くの加入者を得た。今後はなるべく活動に積極的に参加する人を増やしていきたいと考えている（草）。
- ・皆川さんにお伺いするが、大川小学校のことについて、もう少し詳しく教えて欲しい（日野）。
- ・大川小のご遺族の方とも交流させていただいている。108名中、70名の児童が亡くなり、4名の児童がまだ行方不明、教員は10名亡くなっている。ご遺族や研究者を中心に当時のことを調べているが、学校が用意していたマニュアルでは避難場所は近隣の公園や空き地という事が決まっていたが、事前の避難訓練などは行っていなかったと聞く。組織になると誰か一人の意見が通らなかつたり、機能しなくなることがある。
普段『大丈夫』という言葉は安心させたりする時に使うことが多いが、大きな災害の時には『大丈夫ではないかもしれない』と伝えたほうがよいのではないか（皆川）
- ・大川小学校の多くの先生は子ども思いの良い先生だったと聞く。残念ながら「生徒の命を守るということについては十分ではなかったのかも知れない。但し、違う先生があの時適切な対処ができたかどうかはわからない。大切なことは、適切な判断を支える強い意識を持てるかどうかということ。釜石の出来事のような、学校管理下でないときに、子ども達の自主判断による津波からの避難を、自分達の子どもができるか、ということではないか（日野）

- ・最後にあるご遺族からの言葉を紹介いただく。大川小学校のご遺族、卒業生が「命を真ん中において考える」と言っている。別の地域で息子さんを津波で亡くされたお父様は、現在は防災士の資格を取り、命の大切さを多くの方に伝えていらっしゃる。そのお父様から「防災意識を高めることが息子の供養になるのだ。」と会場の方へ伝言としてお伝えさせていただく（皆川）
- ・草さんからお伝えいただくことは何かあれば（日野）
- ・結婚指輪で身元確認に役立ったことが多かったので、引き出しに入っている結婚指輪があれば付けて欲しい。また、ご高齢の方であれば薬やメガネなど、災害時に必要になると思うものを常にカバンに入れておくと安心かと思う。私も常備薬などはカバンに入れている（草）
- ・本日伺った様々なお話を地域に広めていただき、今後も被災地を思い続けていただければ。それが被災地への支援になり、川崎市のためにもなる（日野）

以上